

聖書和訳の先覚者

## 永田方正略伝

木下清

はじめに

明治六年（一八七三）はキリスト教にとって注目すべき画期的な時期であった。

切支丹禁教の高札撤去に相前後して、横浜基督公会、東京基督公会、メソジスト監督教会、カナダ・メソジスト教会が設立せられ、バプテスト教会が伝道を開始し、日本人最初の伝道が始められた。こうした時代背景の中で「ゴール訳摩太福音書」「ヘボン訳馬太福音書」「ベッテルハイム訳約翰福音書」などの聖書と訳が行なわれた。これらはみな日本人の助力を得たとはいえ、外国人宣教師の翻訳によるものであった。その中であって、特筆されなければならぬことは、永田方正（ほうせい）が、抄訳とはいえず外国人宣教師の助けを受けることなく、独力で成し遂げた、最初の聖書の優れた和訳のあったことである。方正の和訳聖書は『西洋教草（おしえぐさ）』と名付けて、明治六年に刊行されたのである。

キリスト教が禁制だった幕末の頃、早くも英訳聖書を自

由に読みこなし、聖書に通じた並々ならぬこの人物に、いったい何人がこれ程までに英語を教え、聖書を与えたか知るを得ないが、この稿が、それを知り得る端緒となることを望んでやまない一人である。

さらに歴史に残さるべきは、『西洋教草』が、序文に聖書の翻訳たることを明示しながら、小学教科書採択を目的として刊行されたことである。方正は、つとに時代の暁を望み、明治五年の学制頒布を予察し、これを捕えた。当時の教科書制度は自由発行・自由採択制で、文部省は、民間側から教科書の著作・翻訳にたずさわる者がつきつぎ出てくることを期待し、それぞれの土地・民情に適した書物を教科書として採択することを勧めていたからである。学制頒布百年を迎えて、方正の識見とともに、聖書が教科書に用いられたという歴史的事実は高く評価さるべきである。

次に、方正の北海道におけるアイヌ研究を含む教育上の研鑽である。残念ながらこのことは、これまでの方正の貢献と結びつくことなく、世に知られなかった。方正の最大の業績といわれる『西洋教草』が、北海道の地に一冊も残されなかったことが憐れして、ついに謎の人物とされて久しかった。

『西洋教草』の本文の紹介と研究については、すでに海老沢有道、畑中岩雄、門脇清、中田実の諸師により高く評価されて久しいが、この並々ならぬ人物の経歴については長い間、愛媛県の人であること以外全く知られていないとされ、昭和四十五年四月刊、中田実師主筆『聖書の謹解』

第六十二号に筆者が、また昭和四十六年六月刊『キリスト教史学』に中川収氏がおのおの報告するまでは、方正の生涯の全貌は世に埋もれていたといつても過言ではない。

ここに綴る略伝は、年譜を作成し、資料を探索し、その証拠を確かめ、克明に現地を調査して、先輩諸師の指導を仰いだ果実である。

### 伊予西条藩士の子に生まれて

一八四四(天保十五)年 一歳 三月一日、伊予国西条藩士の子として、武蔵国南豊島青山百人町の西条藩邸にて出生、宇高辰次郎と名付けられた。貫属(戸籍の在る土地)は、伊予国西条明屋敷一番地である。少年のころから英才のほまれ高く、長じて永田吉平の養子となり、永田静之助と称し、選ばれて当時幕臣教養の機関であった昌平黌に学び、後に、永田方正と改名した。

一八六一(文久元)年 十八歳 西条藩主の侍講に挙げられ、漢籍および古典の教授にあたる。ちなみに、西条藩は定府であつて、藩主は西条に常住していなかった。

一八六七(慶応三)年 二十四歳 慶応三年を迎えて幕末史はいよいよ大詰めとなった。新将軍徳川慶喜は、なおも幕権回復の工作を捨てず、薩長はついに武力倒幕に踏みきった。その五月十三日、方正は時代の暁に先き立って京都御所国事掛から召されて新政のため尽くした、と自ら語っていた。

一八六九(明治二)年 二十六歳 三月七日、東京遷

都を前に方正は、京都御所の任務につき嘉賞に与った。のちに方正の赴く蝦夷地は、この年、北海道と改称し、開拓使設置となる。

一八七〇(明治三)年 二十七歳 十月十五日、妻ミネ(嘉永五年二月十五日生)との間に、長男春雄が誕生。

一八七一(明治四)年 二十八歳 四月七日、西条藩の藩学扱善堂に、方正より先に昌平黌に学んだ西条藩士伊藤竹堂、栗本礒二のあとをうけて漢学教授を申し付けられ西条具権大属に任ぜられた。当時の府県官制は、ほぼ、県令、権令、参事、権参事、典事、大属、権大属、小属、権小属、史生、出仕の順であつた。

### 『西洋教草』などの訳述と大阪

一八七二(明治五)年 二十九歳 三月五日、方正は西条県退職。これは、この前年七月十四日の廢藩置県により西条県を含む二百七十三の藩体制解体政策の結果たるものの如くである。

方正は、この年の八月三日の学制頒布を察知し、五月三日、大阪府東大組第二十三区博労町一丁目八番地(現在の大阪市東区博労町)に寄留し、教育関係の翻訳および著述に従事、いよいよ「教育事始め」期の教科書および教科参考書の著述に励むかたわら、大阪で小学校の講壇に立った。

一八七三(明治六)年 三十歳 三月、当時東京・京都とならび出版文化の隆盛を誇った大阪の群玉堂(後出)から、文部省刊『博物教授解——動物篇第一乃至第四』を

教育界におくった。これは、方正が教科書として世に問うた処女作で、英書サイクル・オブ・サイエンスを訳注したものである。

特筆さるべきことは、この年二月二十四日の全国耶穌教禁制の高札撤廃直後の四月一日に、かねてより翻訳研鑽しこの日に備えていた英訳旧新約聖書からの、日本人単独の手に成る最初の和訳を、『西洋教草』と名付けて刊行したことである。

方正が『西洋教草』を刊行したことは、教界のみならず「学制」百年の年に相会して、あらためて高い評価と顕彰があるべきである。

本書は、教科書たることを目的とし、西洋倫理の紹介としてであるが、「凡そ勸善に関する」個所を聖書から和訳したもの。和装、木版、二二・三センチ、上中下三巻、合わせて九十九丁。上巻には「箴言」（本書には「教戒ノ言」元名プロヴェルブスとあるも、日本聖書協会一九五五年口語訳の訳による。以下同じ）のほとんど全部を収め、第二十三章まで。中巻は「レビ記」「申命記」「出エジプト記」「民数記」「ローマ人への手紙」「テサロニケ人への第一の手紙」「テサロニケ人への第二の手紙」中からの抄訳と「テモテへの第一二の手紙」のほぼ全部。下巻はイエスの説話を中心に四福音書などからの抄訳である。さらに注目されるべきことは、この聖書の訳文が、師範学校など編集のものに比して極めて優れた訳文であることである。

出版は、大阪心斎橋筋南久宝寺町通北へ入ル、皇漢西洋

書籍処文栄堂・前川善兵衛と、大阪東大組第二十三区博労町四丁目心斎橋筋角、群玉堂・岡田茂兵衛となっている。東京、京都および奈良を除く近畿、中国、徳島を中心とした四国および北九州に頒売されたことを巻末に録しているが、現在では本書は、図書館では同志社大学図書館植木枝盛文庫、東京教育大学図書館、関西大学図書館（複製）にしかな所蔵されていない珍しいものとなっている。

なお、聖書に触れたもので教科書として用いられたものには、石川彝（つね）著『西洋夜話』（明治四十年）があるが、これは Peter Parley: Universal History の抄訳で、旧約聖書より説き起こしているが、イエス、マホメット、天竺国の事にまで及んでいる広汎なものである。これは再び明治九年に文部省で『巴里・万国史』と題して翻訳出版されている（『植村正久と其の時代』第一巻参照）。これに対し、『西洋教草』が、聖書自体であることは、世に知られざる意外の事実として顧みる価値が余りにも高い。

一八七六（明治九）年 三十三歳 一月、『暗射地球図解 上下・付万国山河表』（あんせき——地名を記入せず、輪郭のみをあらわした学習用地図）を訳述し、群玉堂（前出）から出版した。これは文部省の『万国地誌略』の付録教科書として編集され、英書から山岳・河川表を訳載している。

十一月、同じく群玉堂から『小学人体窮理問答 全』を出版した。これはウィルソン リーダー第四巻中二に記載した人体窮理の部を方正が訳したもので、この教科書は、大阪市立愛日小学校（当時第三学区大阪府管内第一中学区第一

大区第十三小区小学北浜学校)に、愛日文庫として、方正の『小学口授修身談』『小学生理書上下』(いずれも後出)とともに大切に保存されている。

一八七八(明治十一年) 三十五歳 十月、関原松巖堂(大阪)から『開化農商往来』を著述刊行した。同じく小学教科書であった。

方正はこの年、大阪府下第一大区五小区安土町二丁目三十七番地(現在の大阪市東区安土町)に移転し、その後日ならずして大阪府下西成郡難波村十一番地(現在の大阪市浪速区新川町)に移り、翌年甲府に赴任するまで寄留していた。

### 山梨県教育行政に

一八七九(明治十二年) 年 三十六歳 一月、永田方正著『小学口授修身談』刊行。序文に「我カ今昔ノ所行ヲ顧ルニ罪ヲ此書ニ得ツ者少カラズ：：」と、罪を明確に示した所感を冒頭に述べたこの教科書は、方正の面目を物語っている。

つづいて四月、永田方正抄訳『小学生理書』上下を、前川善兵衛(文栄堂、前出)から出版。これは一八五九年ドイツ生理学者ローゼの選述した生理書と、ドイツ理学者ローレルの『プヒ・デル・ナツール』の両書を抄訳編集したものと序文に記されている。

四月三日、方正は、教育の新体制をめざした山梨県令藤村紫朗の招致に応じ、甲府に赴いた。山梨の郷土資料が伝える歴史の実像を追究するに、「交通の便否が甲斐の文化

の消長に影響し、今日その面目を改めたいといえども、にわかには藩鎮の如く従来教育に根底ある地と、豈比肩し得可けんや。甲斐土着の人士より供給するを得ずして、其の過半を他府県に仰がざるを得ざる実状なりし也」として、それらが方正を招く由縁となった。「山梨県学務課担当申付候事、十五等出仕」

七月、方正は、『由氏植物書』全三巻を翻訳し、浪華天真堂荜井知久(大阪安土町四丁目)から出版した。原著は、一八七四年ニューヨーク刊『セコンドブック・ヨフ・ポタニー』であった。本書は明治八年開設された大阪博物館が大正三年商品陳列所に改組されたのに際し、大阪博物館から大阪府立図書館に寄贈され、閲覧に供されているが、方正が英語に熟達していたことは、この訳文からも充分うかがい知ることができる。

一八八〇(明治十三年) 年 三十七歳 方正は、さらに志をたて、一年余で山梨県を辞任。「山梨県学務課担当差免候事、但し満年賜金十円拝受」

### アイヌの友として

一八八一(明治十四)年 三十八歳 方正は北海道に赴き、五月一日開拓使に任命された。「函館師範学校四等教諭申付候事、月俸十五円」

北海道開拓使は、明治二年七月設置され、明治九年開拓使最高顧問ケプロン(Horace Capron, 1804—85)の献策により、文化・開拓の両面にヴィジョンをかかげ、札幌農学

校の学生は、卒業後五カ年間、開拓使に奉職する定めとされ、学科も教養を含め広範であった。札幌農学校にはまたクラーク (William Smith Clark, 1826-86) の鮮烈な感化によってキリスト教が植えつけられ、内村鑑三・新渡戸稲造らのキリスト教思想家を輩出し、明治文化史上の特異な存在となった。方正は、これらの北海道開拓使の伝統に加うるに、明治天皇の同年八月北海道巡幸に先き立って、アイヌ教育の関心が当局の間にたかまりつつあったとき、学識者として開拓使に聘せられた。

一八八二(明治十五年)年 三十九歳 二月八日、北海道開拓使は廃止となり、北海道は三原一局制度に向かうこととなり、方正は従来通り函館師範学校・函館県学務課勤務等となる。

同年、方正は、アイヌ教育のため明治天皇御下賜金一千元をもって開校した遊楽部(ユウラップ)旧土人学校の教育を振興することを命ぜられ、アイヌ教育法の樹立と教育のための学校調査に赴任した。「五月三日、御用有之山越那出張申付候事」

一八八三(明治十六)年 四十歳 方正の遊楽部赴任は、学識者としてアイヌ語の研究に没頭せしめ、はやくも六月に『北海小文典』を函館で出版するに至った。アイヌのため献身した英国聖公会宣教師パチェラー (John Batchelor, 1854-1945) やチェンバレーン (B. H. Chamberlain, 1850-1935、英国の言語学者・東大教師、アイヌ語の比較研究及び日本における言語学の研究法を移植した) とともに、その業

績はほめたたえられた。

方正は、パチェラーとは、「アイヌ語の辞典」編さん、とくに「聖書の和訳」では相共通するとともに、聖書と訳では十六年、アイヌ語辞典では六年先き立って早かったこととなる。一方、チェンバレーンは、明治十三年、旧約聖書の和訳事業が開始されるときにあたって、彼の持説の具体論として「詩篇邦訳への一示唆」を発表、外国人として日本の聖書と訳史上ユニークな提言をなした点で、不思議にも方正と相通じていることを見のがすことができない。

ついで方正は、アイヌ民族の伝承詩人(ユーカラクル)によって口承されてきた大叙事詩群である「石狩アイヌユーカラ訳文(全訳)」を初めて日本語で『東洋学芸雑誌』に発表し、広く全国に行きわたったその業績は、聖書と訳の功績とともに、これも顕彰されて当然であろう。これは、パチェラーがユーカラ抄訳を『亜細亜協会報』に発表したのとほとんど同時であった。

方正の人となりについては、遊楽部の旧土人学校で、幼少のころ協力し、彼を知るアイヌの酋長シーク等が、在りし日を偲んでその高潔な人格をたたえていると報告されている。学識のみならず、心よりアイヌの友となり、滅びゆく原語への哀惜をおしまなかったことは、後年、方正が著述した『北海道蝦夷語地名解』<sup>⑤</sup>の緒言にも、

「……地名ヲ解セント欲セバ必ズ其地ノ故老ニ質サザルヲ得ズ。地名ノ原語ハ唯故老あいぬノ頭上ニ在テ存スルノミ。若シ故老あいぬ死スレバ地名モ亦從テ亡ブ。是レ

岩村北海道庁長官ト永山長官ノ共ニ愛惜セラル所ニシテ  
……」

と記されていることから証することができる。

一八八四(明治十七)年 四十一歳 十月一日、「兼  
任函館商船学校二等助教諭」

一八八五(明治十八)年 四十二歳 三月二十五日、

「函館小学校教科書編纂委員申付候事」、十二月二十六日

「『函館県管内地誌略』校訂勉勵に付金七円下賜候事」

一八八六(明治十九)年 四十三歳 一月二十七日、

北海道庁官制制定により、函館・札幌・根室三県廃止とな

り、二月三日、「元函館札幌根室三県農商務省北海道事業

管理局樺戸空知釧路三集治監ノ事務ハ北海道庁開庁迄ノ間

従来ノ通取扱フヘシ」、二月二十六日、「函館師範学校教

諭試補申付」北海道庁。九月十七日、「北海道師範学校教

諭試補ヲ命ス」北海道庁。十月十一日、「任北海道庁属叙

判任官六等兼北海道師範学校教諭補ヲ命ス」

一八八七(明治二十)年 四十四歳 一月二十二日、

「北海道庁第一勤務ヲ命ス」

一八八八(明治二十一)年 四十五歳 三月、岩村通

俊北海道長官より、アイヌ語地名の調査を命ぜられ、北海

道十一國のうち千島國諸島を除き調査を始める。

一八八九(明治二十二)年 四十六歳 六月、前年の

岩村北海道長官のアイヌ語地名調査命令を継承して、永山

北海道長官より引き続き命ぜられ、実施する。十一月五日

「陞叙判任官五等」、十二月二十四日、「職務特別勉勵ニ

付賞」官等改正ニ付判任官四等上級俸トナル」

一八九〇(明治二十三)年 四十七歳 三月、アイヌ

語地名調査を了した。三月二十三日、「職務特別勉勵ニ付

賞」、八月十三日、「北海道庁第二部兼務ヲ命ス」、十二

月二十四日、「上京ヲ命ス」

一八九一(明治二十四)年 四十八歳 三月八日、明

治二十一年から三年間のアイヌ語調査の成果を北海道庁よ

り、北海道庁属・永田方正著『北海道蝦夷語地名解』とし

て刊行した。全道五千余のアイヌ地名を、川筋に沿って川

下から上流に向かって配列し、地名の意味を解説したもの

である。北海道に残るアイヌ地名研究の基礎となる業績で

あり、その後のアイヌ地名研究は、みなこの果実を基にし

て行なわれたものである。

方正はこの事業と併せて道庁の命により、北海道の新し

い地名の選定にも当たった。当時、北海道庁はわかりにく

いアイヌ地名に漢字をあてはめた地名、たとえば Satporo

札幌(乾燥広大の意、大陸と訳す)をやめて、アイヌ地名を意

訳してあてようと、方正に命じたのである。

砂川 すながわ(オタシナイ||砂多き沢)

沼貝 ぬまがい(パイ||沼貝多き川)

滝川 たきがわ(ソーラチベツ||瀧のある川)

旭川 あさひかわ(チュベツ||東の流れ早き川)

など、当時拓けた石狩川沿いの村名は、いずれも方正が意

訳して選んだものであった。  
こうして方正は、『北海道蝦夷地名解』によって不朽の

名を北海道にとどめた。

また、方正は年来地名調査を担当して、全道をくまなく歩いたので、後これを東京帝国大学に伝え、言語学の権威金沢庄三郎の研究を生んだ。この年に神保小虎と共著で、『北海道庁地理課から『北海道地名普通単語集』』を出版。

三月二十日、「北海道庁第二部ヲ命ス」、八月十五日、「非職ヲ命ス」、九月一日、「札幌農学校嘱託講師辞令非職北海道庁属 和漢学講師ヲ嘱託ス」

この秋、方正は札幌農学校の講師となった。札幌農学校は、明治十九年北海道庁設置によってその所管となり、それ以降外人教師を廢して、卒業生の優れた者を留學せしめてこれを教授とした。外人教師が去ったあと、この年二月帰朝した新任の新渡戸教授は、これに処して毎週課外の英学研究会を起すなど対策を講じたが、その一環として和漢に通じるのみならず、英語にも識見ある鑽学の方正を招き、同時に札幌農学校の予備校であった北鳴学校（明治二十八年閉校）でも教べんをとらせた。明治二十八年約一年の中断を除き、同三十一年まで、漢文・倫理を講じ奉職したと資料は伝えている。「依願免本官（諭旨）北海道庁」

一八九二（明治二十五）年 四十九歳 一月十五日、

方正は北海道庁退官の後も北海道教育評議員会による「旧土人教育ニ関スル取調ノ件」委員に就任、従来の業績に甘んずることなく、さらに奉仕を続けた。

九月一日、スミス女学校に兼任講師となつて和漢の教べんをとる。これより前、札幌は北海道開拓の中心で、極め

て重要な地でありながら、女子高等教育機関がなかった。そこで、ながくこの地に留まつて伝道および女子教育の使命を果たしたいとの志をおこしたアメリカ人スミス女史 (Sarah Clara Smith, 1851—1947, 在日 1880—1931) が、明治二十年創立したのがスミス女学校である。この学校は、明治三十六年北星女学校と改称し、現在は大学を含む北星学園に育っている。

方正は、この年から二十八年までは教壇に立ったものごとくであるが、その在任中に、同校の校歌をつくつていく。これは、同校卒業生が合作し、方正の指導と添削によつて成つたもので、明治三十六年、「北星女学校制校歌・永田方正作詞・スコットランド曲」と正式に発表された。

一、北の空なる大星は はずこの隈をも照らすらん  
文の水上むすぶての 滴ごとに影は見えける  
二、昔の今の文の道 磨くや光を増すがみ

さしそう星は北の空 千代へてすまん影ぞゆかしき  
一八九三（明治二十六）年 五十歳 七月、方正は、

「アイヌ教育の方法」を、岩谷英太郎氏と共著で『北海道教育雑誌』九号に発表した。当時、パチエラー等が北海道各地のアイヌ部落に学校を設け、教育を通じてのキリスト教教育を活発にし、札幌に学校を設けるや、それに励まされた北海道教育会は、明治二十五年、既述の評議員会でアイヌ教育方針調査を決議した。委員にあげられた方正と岩谷が報告書を提出すると、教育会はこれを北海道庁に建議し、これがその後長く展開されたアイヌ教育の基礎案とな

った。

八月、『史海』第二十七号に「義経蝦蟇考」を録した。筆者は、始めこれは題名より察して、義経についての随筆と思いつつ、関大図書館で本書を開いてみた。ところが意外にも、義経蝦夷潜入をアイヌ語符合より唱えた説に対する、方正得意の言語考証により反論した格調ある論説で、ここにも彼の面目の一端をうかがうことができる。

一八九六（明治二十九）年 五十三歳 方正が札幌農学校講師に就任した明治二十五年に、新渡戸教授を中心として「札幌史学会」が生まれたが、この二十九年に札幌の最初の史書『札幌沿革史』が発刊された。編集委員は、永田方正、菅菊太郎、河野常吉、進竜男、白野夏雲、高畑宜一、高岡熊雄であった。

一八九八（明治三十一年）年 五十五歳 この夏、方正は札幌を去り、函館区元町六五番地に移居、遺愛女学校直教師であったミス・デカルソン (Augusta Dickerson, 1859-1946) の招きを受けて、その九月から四十二年四月まで同校の教壇に立ったようであるが、四十年六月の同校舎失火のため資料を失い、くわしいことはさだかでない。なお遺愛女学校は、明治十五年、米国メソジスト、エピスコパル教会婦人外国伝道協会の創立にかかるもので、北海道庁立学校の開設に先き立って女子教育に努めた。

本年譜作成にあたり、現遺愛女子高等学校、町野勉校長のご好意によって、方正の教え子である明治三十九年卒業生小川くに姉（千葉県在住）他二名の書面による証言、およ

び同四十三年卒業生中村ヒデ姉（室蘭市在住）他一名の筆者の面接による証言が得られた。いずれも一致して、教育者としての方正の偉大さを敬慕している。

一八九九（明治三十）年 五十六歳 方正は、この年の鳥居竜蔵による石器時代人種論（アイヌ説・非コロボックル説）などの影響を受け、坪井正五郎の主宰する『人類学雑誌』に投稿し、中央への接触を怠らなかつた。

鳥居竜蔵は、明治九年七歳で徳島観善小学校に入學し、ウィルソン リーダーから直訳された『小学読本』巻一の「凡地球上の人種は五に分れたり、亜細亜人種、欧羅巴人種、馬來人種、亜米利加人種、是なり」を読んだ。竜蔵は「不肖ながら人類学を専門とするようになったのは、知らず識らずの間に、この読本の五人種の影響と考えられる」と回想しているが、このとき竜蔵は、徳島の小学校で、当時阿波一円に採用されていた方正の小学校教科書『西洋教草』について学んだことは推論に難くない。鳥居竜蔵は後年、カトリックに回心し、上智大学の教務に参与し、昭和二十八年敬虔な信徒として召天したのも、両教科書に縁なきに非ずと思われる。

一九〇〇（明治三十三年）年 五十七歳 方正は、この年八月五日、日本メソジスト函館教会で、キリスト教界で令名の高かった山鹿元次郎牧師（祖山鹿素行別家七代目）からキリスト教信者として洗礼を受けた。現在の日本キリスト教団函館教会に在る記録がこれを証している。

一九〇三（明治三十六）年 六十歳 四月二十八日、



東京博文館から方正編集『明治新訂 作詩精選』上下巻、和装小形判を発行した。これは、方正が明治二十四年札幌において稿を了していたものであった。筆者はこの『作詩精選』を、大阪府立図書館でひもといて、方正が大変美しい文章を書くわけを目的の当たり見る思いがした。

この前後、方正は札幌・創成川の建設者大友亀太郎の偉業と生涯を録し、『大友亀太郎伝』を執筆した。この伝記は、北海道庁に所蔵されている旨の報告を得ている。

### 函館を去り東京へ

一九〇九（明治四十二年）年 六十六歳 この春、函館に別れを惜しみつつ、東京市麻布区に居を求め、後赤坂区松坂町四番地（現在の港区赤坂八丁目）に仮寓し、坪井正五郎の推薦で東京高等女学校に国文教諭として奉職した。

一九一〇（明治四十三年）年 六十七歳 東京に移って早々の中に、京華日報社刊の『世界』に「北海史料」「蝦夷雑話」「北海志料」を連載して世の期待に応え、また、『北斗』（北斗社刊、樺太）に「樺太の地名に就いて」を公けにして方正の意欲の変わりないことを示した。

一九一一（明治四十四）年 六十八歳 七月、脚氣と心臓病が悪化し、八月二十二日、日本橋病院でその生涯を閉じた。『中央区史』によれば、日本橋病院は明治十五年設立、少なくとも昭和三十三年まで東京都中央区日本橋江戸橋一丁目十三番に存していた。

方正の死をいたんだ加藤扶桑は、『世界』第八十八号に

「晩年懣軻志を得ず」と報じた。気の毒な晩年であったと思われる。伝えられるところによれば、方正の晩年は、函館で身近の不幸が続き、その日の生活にも困りながらも、アイヌの地名調査に没頭していたところ、かねて学縁のあった坪井正五郎その他、人類学者の世話になった、ともいう。遺骨は、葬儀が終わると、ただひとり身近にあった孫のひさえに守られて函館市住吉町の市営墓地に葬られた。その末裔も幸い筆者が見出すにいたったのである。

遺稿に「内地地名蝦夷語解」があり、『世界』に連載され、哀惜とともに読まれた。

方正の手沢の書は、函館市において永年学務委員であった実業家小熊幸一郎の尽力で、函館図書館に寄贈保存されるところにも、函館市功労者としてながく讃えられることとなった（『函館市誌』昭和十年刊）。しかし、聖書と訳の先達としての業績については、『西洋教草』が北海道の地に一冊も残されなかった事情もあって、ほとんど知られていないことは惜しまれる。（このため、関大キリスト教青年会は、聖書と訳頭彰のため『西洋教草』の複製を北海道庁および函館市立図書館へ贈っている。）

ともあれ、永田方正は、聖書と訳史に不滅の業績を残し、また、すでに滅びようとするアイヌの文化遺産を学問的果実として伝えた先覚者でもあった。

おわりに、本略伝は、相当部分を省略し、引用・参考文献の記載を掲げなかったので、桃山学院大学人文科学研究

所『キリスト教論集』第九号の拙稿「永田方正年譜」を参照願いたい。なお、方正の訳文の考察と彼の宗教思想をうかがい得る優れた研究としては、中田実『聖書の謹解』第59、60、62、83号を、また『西洋教草』の書誌学的紹介として、『興文』一九七三年二、三月号、門脇清一『西洋教草紹介』のご一読をおすすめする。

## 注

① 『西洋教草』の聖書本文に先き立ち、例言において次のとおり自ら記述している。

「本書ノ原本ハ『オールド・エンド・ニュー・テストメント』ニシテ、一千八百十六年亜米理加『ニューヨーク』聖經社ニ於テ、『ヘブリュー』『ギリキ』文字ノ原本ヲ訳シ、且ツ民間訳ヲ校合改正セシ書ヲ、再ビ一千八百六十八年同所ニ於テ上木シタル書ナリ」

② 明治五年、文部省は学制を頒布し、全国に小学校の創置を命じ、旧寺子屋教育の面を一新するため教員と教科書の供給を先とし、まず師範学校を開いて教員を養成し、読本の発行を急ぎ、巧運より拙速を重んじ、一時の急をしのいだ。いま伝わるところの『小学読本』巻一（師範学校編輯・文部省刊行・田中義廉編輯・那珂通高校正）は、ウィルソン リーダーを逐一直訳したものである。当時は直訳流行のあまり、ウィルソン リーダーの訳文に英音の仮名を冠し、漢文訓点式に一二三を以て反り点を付した虎の巻さえ現われた。したがって、『小学読本』の訳文も誠にお粗末で、キリスト教に理解がなかっただけでなく、語学力不足のため、多くの誤訳傑作を生んだが、その一つ「Willsons First Reader」—— O, God, I thank thee

that the night, in peace and rest hath passed away, And that I see in this fair light My Father's smiles, which make the day.

『小学読本』——「天津神・再拜、昨夜も無難に過ぎて、大幸なり、今朝夜明けて光を下し給ふにより、父母の息災なるを見ることを得たり、多謝」

この My Father (父なる神) の訳に苦しみ、父母としたものと解される。このように文部省などを悩ました訳文に比較しても、方正がいかにすぐれていたかを察し得る。

③ 日本聖書訳史上、「聖書和訳者永田方正なる人物については愛媛県の人であること以外全く知られない」とされていたが、筆者は、昭和四十五年一月、聖書と訳史研究者中田実牧師が、「彼が愛媛県のどこの生れであり、どんな経歴の人物であったのか、本書を入手する幸運を得たこの方、県関係の人びとはもちろん、知友先輩方に依頼することにも、私自身も各種資料を調査して来たが、未だに何の手がかりも見出されない」（昭和四十五年一月発行、中田実主筆『聖書の謹解』第59号九頁）との公開依頼に答えて、たいへん美しい文章で書かれた「北海道蝦夷語地名解」（関大図書館所蔵本）の写真版を中田牧師に送り、先生から、「永田方正について新しい光を与えられた事になります」と喜んで下さった嬉しい思い出が、またこの方正年譜（略伝）取りまとめの端緒となり、江戸↓伊予↓大阪↓山梨↓北海道↓東京と経歴が連なったことを付記して感謝したい。（関西大学キリスト教青年会理事）